

ハーヴェイ・コックスと彼の業績

野村文子*

H. Cox and His Works

Fumiko NOMURA

要 旨

アメリカ合衆国の宗教と言えば「市民宗教」のキーワードとともに、ベラー (Robert N. Bellah) の名前が日本ではよく知られている。当然のことながら、アメリカ合衆国には他にも多くの優れた研究者がいるのだが、それがそのまま日本に反映されていないのはなぜか。日本にその分野の研究者が少ないということも理由の一つに挙げられるだろうし、ベラーの研究者が熱心であるとも考えられる。

以上の認識から、筆者は、ベラーに対して、ミード (Sidney E. Mead) や、ブラウアー (Jerald C. Brauer) などの、いわゆる「シカゴ系」の紹介に努めてきた。ミードの場合は、アメリカ合衆国の宗教的リーダーは偉大なる闘争、すなわち、宗教の自由と教会と国家の分離を成し遂げるに当たって、知的な厳しい論争をおこなわず、無神論と協力したことを指摘して、アメリカにおける神学論争の欠如を指摘する。

本稿では、さらに、コックス (Harvey Cox) を取り上げ、アメリカ宗教史に果たした役割を検証する。

キーワード：アメリカの宗教、神学論争、無神論、世俗都市、饗宴

はじめに

日本には多くのアメリカ映画が輸入され、日常的にアメリカは我々の周囲にある。古くは、『ミシシッピ・バーニング』、『刑事ジョン・ブッカー目撃者』、『カラーパープル』など、宗教が前面には出なくとも、ほとんどを宗教の視点で解説することができる映画があった。現在、

*教授 比較宗教学・アメリカ宗教史

アメリカでヒットしている『スタートレック』、『ヒーローズ』は、なかなか宗教的には解説できない。そのなかで、『The West Wing』（日本訳『ホワイトハウス』）は、まさに現代アメリカ宗教の教材にうってつけのようなストーリー展開である。有名新聞（New York Daily News）が「最良の脚本、最上の演技、現在、最も目の離せないドラマ」と絶賛したこのテレビ番組は、政治的ドラマであると同時に、アメリカ文化そのものを我々に教えてくれる。日本では、吹き替えつきで、第4シリーズまで発売されている。超能力とか、スピリチュアリティを扱っているのではなく、現実に潜む、かつ、人種やジェンダーなど他の要素と複雑に絡むアメリカの宗教が、ここにある。

これを糸口に、日本にアメリカの宗教がどのように紹介されてきたのかを概観する。外国の文化が輸入され、紹介されるには、その仕事を請け負う「研究者」が存在しなければならない。最初は、ベラーの「市民宗教」が学会の主なテーマとなった。ヨーロッパのように、ひとつの国にひとつの「公認宗教」という構図を採用せず、アメリカ合衆国は、建国において、いわゆる「宗教の自由＝政教分離」の形式を採った。しかし、時代の経過につれて、建国の政治家たちが予想もしなかった「教派」が生まれたり、移民とともに宗教が国内に持ち込まれたりした。ひとつではないが、全員に「共通の教え」が広まり、それが、国民の「アイデンティティ」となる。すなわち、「市民宗教」であり、「キリスト教国アメリカ」の完成である。J. F. ケネディがアメリカで初めての〈カトリック教徒〉の大統領であり、彼の就任演説が、その「モデル」となった。

ミードが『アメリカの宗教』（*The Lively Experiment: The Shaping of Christianity in America*）においてアメリカの宗教の特徴として提示したのは、宗教の自由の成立の背景である。市民宗教とは矛盾しないが、ミードの場合は、その成立を分析して、そこに〈厳密な意味での神学論争〉が欠如していたことを論証している。ここが問題である。「人々の心の中に、当時の神学や礼拝のやり方の相違点は、たいした重要性をもたないのではないか、まして戦争しあうほどの問題ではないのではないかという疑いが芽生えつつあった。」¹⁾ミードは、18世紀の思想的影響を受けたジェファソンに代表される信仰形式を〈合理主義〉、魂に訴える宗教的リヴァイヴァリストに代表される直感的宗教を〈敬虔主義〉と捉え、この二つの運動は、出発点において、伝統への挑戦という意味で同じ基盤を持っていたと論じている。

ミードと同じく「シカゴ大学神学部」出身で、かつ、同大学で教鞭を執ったブラウアーが、平明で文学的な文体でアメリカ宗教史を書いたのが『アメリカ建国の精神—宗教と文化風土—』（*Protestantism in America: A Narrative History*）である。第1章の《諸教派の到着（1606年）》から、第18章の《新たな課題》（1960年代）までの歴史が、史実に基づきつつ、宗教の視点

から物語（ナラティブ）として描かれている。アメリカの大学では必読文献であり、大学内の書籍売りに置かれている本書も日本では（原書はもちろん、翻訳でさえ）ほとんど読まれていない²⁾。ベラーとは大きな違いである。

ここで、もう一人、忘れてはならない研究者がいる。『世俗都市：神学的展望における世俗化と都市化』（*The Secular City: A celebration of its liberties and an invitation to its discipline*）で一躍有名になったハーヴィ・コックスである。1965年に出版され、翌年には、すでに9版、および、改訂版を出した。研究者の間に「世俗化論争」を引き起こし、1969年には、塩月賢太郎の訳が出ている。しかし、同じくコックスによって、同書の5年後（1969年）に書かれた『愚者の饗宴』に注目した人は少ない³⁾。コックスは、序文で「私は、幾分、別の方向に向きを変えた。『世俗都市』を〈アポロ的〉とすれば、本書は、より、〈ディオニュソス的〉であり、より、遊戯的であり、より、〈宗教〉に対して寛容である。本書には、より、〈魂〉がこもっているとさえ言う人がいるかもしれない⁴⁾と述べている。本稿は、この点に注目して、（現代の日本において）その研究の必要性和意義を指摘することを目的としている。

第一章 アメリカ宗教史研究の動向

第一節 ベラーと「市民宗教」、その後

ベラーの名前は研究者のみならず、一般読者にもよく知られている。『日本近代化と宗教倫理』（*Tokugawa Religion*, 1957）が、1966年に翻訳され⁵⁾、さらに、『社会変革と宗教倫理』（*Beyond Belief*, 1970）が、1973年に翻訳されている⁶⁾。前者では、日本における伝統社会と近代社会の関係に焦点が当てられている。後者では、アジアについて論じたあとで、最後の11章において、自国アメリカが登場してくる。〈アメリカの市民宗教〉である。特定の宗教教団を指すのではなく、国民的なアイデンティティとなるような宗教、すなわち、国民的な規模での儀礼や象徴を「市民宗教」（civil religion）と規定したのである。

それに説得力を持たせるため、ケネディの大統領就任演説が引用されている。短い演説の中にケネディが三つの箇所で「神」に言及しているのは、なぜか。どのように言及したのかが問題提起となっている。もちろん、「市民宗教」という用語は、ベラーが最初ではなく、ルソーの『社会契約論』が基本にあり、ルソーの場合は、神の存在、来世の生活、善に報い悪を罰すること、宗教的不寛容の排除である。ベラーが、「私の知っている限りでは、アメリカ建国の父たちは〈市民宗教〉という言葉を用いなかったし、また私は特にルソーの影響があったと論じるつもりは毛頭ないが…」⁷⁾と記しているように、ベラーは、これに新しい意味を持たせた。

さらに、『心の習慣－アメリカ個人主義のゆくえ』(*Habits of the Heart: Individualism and Commitment in American Life*, 1985)が、1991年に翻訳されている⁸⁾。本書の「訳者あとがき」において、「アメリカの宗教界・思想界におけるベラーの名は、『市民宗教』の語と切り離せないものがある。しかし、私(島蘭)との個人的な会話のなかで、ベラーは今では『市民宗教』の語は適切ではないと思っていると語っていた。一つの『市民宗教』ではなく、多様な伝統の響き合いをよしとする考え方への転換があったといえる」という記述がある。また、本書の限界として「白人中産階級をもってアメリカ文化を代表するもととしている」⁹⁾ことをある程度、認めており興味深い。

第二節 ミードと「生き生きとした実験」

ベラーの『日本近代化と宗教倫理』が、ハーヴァード大学の極東言語学科および社会学科に提出した(1955年)学位論文を発展させたものであり、同大学とは関係が深い。しかし、その後、カリフォルニア大学バークレー校の社会学の教授として活躍している。日本の研究者が出会い、影響を受けたのは主にバークレー校においてである。

一方、ミードはシカゴ大学を拠点に研究活動をおこなった。彼は『アメリカの宗教－アメリカにおけるキリスト教の成立』において、〈アメリカ宗教の独自性〉を以下の4点にまとめている。「第一の要素とは、キリスト教会の歴史は、断絶することのない連続体であるということ。第二は、連続体としての要素がアメリカにおいて破片のように分裂した理由は、ヨーロッパの教会や分派がそのまま時間的でなく空間的に移植された点にあること。第三は、以上のような背景の下で、宗教の自由が実践的に追求され、『フロンティア』という条件が、教会を全く新しい、かつ独自の発展を促したこと。そして、最後にあげられる要素は、一見混沌として見えるすべての教会や分派の発酵状態は、〈今までの歴史に見られなかった、何か全く新しいものを生み出しつつ有る〉ということである。」¹⁰⁾

連続性を失わず、かつ、全く新しいものを作り出したアメリカの宗教を、ミードは「宗教の自由」と理解し、分析した。ミードが「詳しいアメリカ宗教物語」を目指したのではないと断言しているように、そこには「明確な主張」があり、メッセージが込められている。ミードは、師であるスイート(William Warren Sweet)の「18世紀の植民地時代のアメリカにおいて、教会と国家の分離を最終的に成し遂げたのは左派のプロテスタントイズムの勝利である」という理論に反対して、『左派』よりはむしろ重要なのは、右派内部の戦いであり、敬虔主義であると記している。ミードの理論展開はここから始まる。敬虔主義者(リヴァイヴァリスト)は宗教の自由を獲得するために理神論者(無神論者ではない)の協力を求めたが、すぐに合理主義

者との同盟を断ち切った。両者の同盟は一時的であり、厳密な意味での神学上の議論はなかったということになる。宗教の自由は、どのような社会においても、その存在と安寧とは、その社会の構成メンバーが、共通の宗教上の信条を共有することによって初めて成立するという点を捨て去ることを意味しなかったからである¹¹⁾。

神学論争がアメリカにおいて欠如していたというのが、ミードが最も主張したかった点であると筆者は理解している。

第三節 ブラウアーと「アメリカ建国の精神」

ミードがアメリカ宗教の独自性を論じるにあたって、社会全体のしくみは、政府の秩序と法の遵守という共通利益を土台にして初めて成立するという前提から出発し、アメリカは、〈国家に強制力〉を持たせるという点だけを拒否したと結論づけた。この共通利益が、すなわち、ベラーの「市民宗教」に当たり、キリスト教の信仰ということになる。ミードが、それでもなお、根底において合理主義者の果たした役割を重要視していることは、ジェファーソンやリンカーンへの深い尊敬の念を感じるからであろう。

同じシカゴ大学出身で、ミードの弟子にあたるブラウアーは、若くして同大学神学部の学部長に就任するかたわら、多くの著書を書いた。前述の『アメリカ建国の精神』は、アメリカの宗教史を歴史物語形式で語り継いだもので、現代の多様な論点を指摘し、アメリカの宗教と文化、その原点を平明に書き記している。ミードは「アメリカ史の中で、インディアンについて書かれた歴史ほど、暗くて陰惨なページは、他にない。…インディアンにとって、時間の余裕など全くなかった。…しかし、さらに悲劇的なことには、白人にとって、後悔する時間はなく、ただ、厳しい自然の中で、労働する時間しかなかった」¹²⁾これを導いたものを時間の脈絡だけで解決しようとして、その結果、「明白な宿命」という神話を曖昧なものにしている。ブラウアーの場合は、全体的に、このような違和感がない。インディアンの場合もそうだが、特に、奴隷制度の場合はきわめて「公平に」両者の神学的論拠を示している。第11章の「奴隷制と分裂」では、奴隷擁護として引用される「(ノアは) こういった。『カナンが呪われよ。奴隷の奴隷となり、兄たちに仕えよ』」(創世記九・二五)を示し、次に、奴隷制反対論者として、セオドア・D. ウェルドにかなりのページをさいている。奴隷制度反対の真の理論を提供したのは、「リヴァイヴァル」であることを前面に押し出した¹³⁾。

本稿で提示したいのは、以上のような研究書だけでアメリカの宗教を我々日本人が理解できるだろうか、という問いである。さらに、現時点での結論として、ハーヴィ・コックス研究の必要性を示すつもりである。

第二章 アメリカ合衆国の「現実」

第一節 「わたしはあなたの主，神なり。わたしのほかに，何者も神としてはならない」

研究者の理論を裏付け、それをより鮮明なものにするために、アメリカで大ヒットしたテレビ番組『The West Wing (日本訳は〈ザ・ホワイトハウス〉)』¹⁴⁾を取り上げる。確かにファンタジーではあるが、その範囲内で信憑性を持ち、アメリカの宗教伝統を知る上で、最良の資料である。アメリカでは「ウイングナッツ」と自称するファンも存在し、高校の公民やアメリカ史の授業で視聴される場合もある。一般の人々を大勢巻き込んでいるということは、それだけ、魅力があるわけだが、日本人が見ると簡単には楽しめない。政治や経済に関する知識はもちろんであるが、さらに、宗教的背景、キリスト教、ユダヤ教、聖書の内容、人種と宗教の関係を熟知していないと、なんのことも理解できないし、笑えない。

1999年9月22日にNBCで初放映された。大統領を演じるマーティン・シーンは、古くから伝わる演劇界の格言として「ページに書かれていなければ、ステージの上にはない」を引用して、「つまり、作品が成功するには、基本的にすぐれた脚本が必要だという明確な指摘である」と述べ、製作総指揮のジョン・ウエルズと監督のトミー・シュラムに加えて、脚本・原案担当のアーロン・ソーキンを讃えている¹⁵⁾。第1話は、原題が《PILOT》だが、日本訳は〈大統領と側近たち〉となっており、初回にふさわしく登場人物が、ひとり、また、ひとりとポケットベルで呼び出される。「ポータスが自転車事故」

ローリー：友だちのポータスって、変な名前ね。彼に、自転車の乗り方を覚えなさいと伝えてちょうだい。

サム：言っておくけど、彼は友だちじゃないよ、ボスなんだ。ポータスは名前じゃなくて、肩書きだ。

ローリー：「ポータス」って？

サム：合衆国大統領（President Of The United States）の略だよ。

いろいろ事件が起こるが、そのなかでも、次席補佐官ジョシュ・ライマンが、テレビ番組でメアリー・マーシュ（熱心な保守派のクリスチャン指導者）に対して失言する場面は圧巻である。「あなたは私の信じる神を、私が崇める神を信じないのですか」「あなたの神は〈脱税〉に忙しい」。この発言は彼を窮地に追い込む。保守派の票がないと大統領選挙に勝てないからだ。キリスト教権威を呼び、謝罪させようと広報部長のトビー・ジーグラールが奔走する。ここで、

マーシュがジョシュに向かって「そのニューヨーク流のユーモアが賢いと思っているのよ」と言い、それに対して仲裁役であるはずのトビーが「ユダヤ人のことだろう、彼女は君と私のことを言ったんだよ」と反撃する。ここで、5人のスタッフのうち（首席補佐官・次席補佐官・広報部部长・広報部次長・報道官）2名がユダヤ系であることが明かされる。（この後どうなることかと観客がはらはらして見ていると）聖書の記述での論争に決着をつけたのが大統領である。「わたしはあなたの主、神なり。わたしのほかに、何者も神としてはならない。」こう言いながら登場してくる。大統領は聖書のすみからすみまで読んでいる。

C. J. クレグを演じるアリソン・ジャーニーが、「一般的なアメリカ人と同じように、わたしはC. J. になることで学びました。「ザ・ホワイトハウス」はすばらしいやり方で自覚を促します。視聴者をみくびった語り方はしていません」¹⁶⁾と述べているように、聖書を押しつけているのではなく、思い出させている。第11話では、カシミール国境でのインド・パキスタン紛争を扱っているが、その仲裁役のマーベリー卿に「ヨハネの黙示録」を暗誦させる¹⁷⁾。「すべての問題は宗教だ」と彼は叫ぶ。第14話では、死刑の問題を真正面から取り上げ、さまざまは宗教の立場から、意見を述べさせている。オーヴァル・オフィス（大統領執務室）で大統領が（カトリックの一信者として）祈る場面があるが、「信教分離に反するかどうか」と考える以前に、深い問いかけに圧倒される。

第二節 「イサクとイシュマエル」：9. 11 後の特別番組

2001年9月11日の同時多発テロ事件後、特別番組が急遽制作・放送された。（これは日本でも放映され、DVDが発売されている。）初回放映が1999年9月20日であり、およそ2年後のことである。そのタイトルがまたもや聖書からの引用、「イサクとイシュマエル」であり、聖書に馴染みの薄い者にとってみれば、何を意味するかは理解し難い。（これは、最後に大統領夫人の語りというかたちで明らかになる。）まず、FBIが「ラキーム・アリ」という人物がホワイトハウスの職員であることを突き止めることから物語が始まる。クーラム・シャリーフなる者が逮捕され、ラガーディア空港爆破が未遂に終わり、仲間3名の氏名が判明する。その一人が「ラキーム・アリ」というわけだ。ホワイトハウスはクラッシュ（全館封鎖）に追い込まれ、すべての人の出入りが不可能となる。その時、「大統領教室（高校生）」のメンバーがホワイトハウスを訪問して、ジョシュ・ライマンの説明を受けているところだった。

クラッシュが解かれるまでの間、ここで高校生とスタッフたちの臨時の討論会が開かれるという設定だ。「なぜ、アメリカは世界中から憎まれるのか」これが最初の質問。これにジョシュ・ライマンが答える。イスラムにとっての過激派は、キリスト教にとっての何かを高校生

に問いかけるが、「ファンダメンタリスト」「エホバの証人」…すべて違う。正解は「KKK」なのだ。キリスト教の保守派はテロはやらない。何百万人のイスラム教徒はテロという手段には訴えない。テロをおこなうのは、ほんの一部だ。そこへ、トビー・ジグラーが呼ばれる。「ひげがすてき」という女子高校生に「勝手だろ」と答えつつ、「ひげ」や「ベール」の長さや形の国家が決め、それを破ると国家に対する犯罪となることが問題だと言う。女性が教育を受けられず、就職もできず、サッカー観戦もできない。これが問題だと言う。ジョシュ・ライマンがこれを「Plural Society」と説明する。これが、この番組のキーワードだと筆者が考える。そこへ、サム・シーボーンが来る。彼は、テロの専門家であり、焦点が「テロ」に絞られる。「テロリストは100%の失敗率」とサムは断言する。対象国がそれによってますます強くなる。では、テロはどこからくるか。絶望的な貧困からだという答えに、チャーリーが「ぼくが住んでいるサウスイーストも絶望的だよ。崩壊した教育、麻薬、銃…」つまり、テロは国外からだけではない。若い世代に「今のアメリカ」を問いかける。

このシーンの間に、補佐官によるアラブ系「ラキーム・アリ」への尋問のシーンが入る。MITで応用数学専攻したこと、政治の仕事を選んだこと、サウジへの派兵反対の抗議集会に参加して逮捕されたこと、父親がイスラム過激派「聖地の守護者」へ寄付をしたこと…疑えば切りがない。「なぜ、私が疑われるのか?」「それなりの代価（pay for）を支払わなければならない」と補佐官。沈黙。犯人がドイツで逮捕され、彼は「釈放」される。彼は「補佐官、あなたは忘れたのですか？ 大統領やスタッフや大統領の娘や私たちが襲われた時、撃ったのは白人で、狙われたのは黒人だったことを」と言って立ち去る。アメリカが抱える問題がいかに複雑であるか、補佐官の苦悩に満ちた表情がそれを示している。彼はまた仕事に戻る。そこへ補佐官が来て「さきほど、代価を支払わねばならないと言ったのは、君が犯人と同じ人種だからだ」と説明し、その他の発言に対しても謝る。私はふだん、あのような発言はしない人間だが、「特別の状況」だった。「君が仕事に戻ってくれてよかったよ」

終わりのところで大統領夫妻が登場する。まず、大統領に向かって、一人の高校生が質問する。「あなたは高潔な人になりたいですか」「なろうと努めているよ」ここから会話が進み、高校生は《殉教者》になりたくないかと聞く。大統領は、自分の信念を貫くために〈死ぬ〉人を殉教者と言うが、私は《英雄》になりたい。英雄とは、国のために〈生きる〉人を言う。自分の信念のために、自殺したり、殺人を犯すのはいけないと答える。大統領が去ると、今度は夫人が座ってじっくりと語り出す。これまでの番組では、聖書のくだりは、おもに大統領の出演だったが、今回は夫人だ。旧約聖書を引用する¹⁸⁾。アブラム（アブラハム）と妻サライ（サラ）との間の子がイサクで、ユダヤ人の始まりであり、アブラムと妻の女奴隷との間の子がイ

シュマエルで、アラブ人の始まりであると聖書に書いていると説明する。「大事なことは、二人と一緒に父親を埋葬したことなのよ」と結論づける。これを受けて、ジョシュ・ライマンが「7,300 万年前のことだけだね」と言う。さらに続けて「世界にはいろいろの考えがあるんだよ。それを認めよう。それが、複数社会 (Plural Society) だ。」

第三章 ハーヴィ・コックスと彼の業績

やっと、『世俗都市』の著者として有名なハーヴィ・コックスにたどり着いた。ハーヴァード大学を拠点に氏の活躍は目覚ましく、著書も多い¹⁹⁾。発想や主張にも、変化や発展があることは十分予想される。しかし、すでに述べたように本稿は、コックスの理論の変遷をたどるところまでには至らず、氏の著書の再評価の重要性を指摘するにとどまる。詳しい分析はこれからである。他の著書を紹介するのに、アメリカの出版社は「『世俗都市』の著者であるハーヴィ・コックスの著書」と記しているが、その5年後の1969年に出版された『患者の饗宴』についてのコメントは全くみられない。それどころか、入手さえ不可能だ。古本でさえ何度試みても入手できなかった。出版後、日本の宗教系の大学の図書館が購入して保管していたものを借用してやっと読むことができたのである。

コックスによれば、「本書は、一部分、『世俗都市』に対してなされた批判に対する反論としておこなう思索から生まれた。…本書は、『世俗都市』より「魂」がこもっているとさえ言う人がいるかもしれない。私は世俗性を認めることから撤退することなく、ここで、瞑想、神秘思想、祈り、儀礼を含む諸問題の異なった領域について触れている。私は、祝典や典礼の方便ではない意義を特に強調する。しかし、私は、その結果として、『世俗都市』を無効にするわけではない。」²⁰⁾つまり、一躍コックスを有名にした『世俗都市』の姉妹編であったわけであり、より、宗教学的であると言えるかもしれない。

現時点でのまとめと展望

日本はアメリカ合衆国ときわめて深い関係にあるが、両国の関係は常に友好的とは限らない。対等とは言い難い点もある。筆者が大学生のころに各大学で設置された〈地域研究〉の理念は、基本的には「相手国を知らないことによる不幸を避ける」ことであった。相手国の政治・経済はもちろん、文化・宗教・慣習など、誤解から起こる〈不和〉が戦争に発展するのを避けることが、研究の使命であるという共通認識があった。この原点に戻り、現時点での両国の関

係を検証する必要があるだろう。政治・経済は比較的調べやすい。資料も入手しやすい。英語の勉強も、対象学年を低くするなどの努力がみられる。このような状況のなかで一番わかりにくいのが〈文化・宗教・慣習〉の分野である。相互の宗教伝統の理解には、正確でポイントを突いた研究者の紹介が必須であろう。

以上の認識から、本稿では、まず、第一章で、ベラー、ミード、ブラウアーの仕事を概観して、その役割を検討した。表題にした〈ハーヴィ・コックス〉の研究は、実は、着手したばかりである。ここに、現在のアメリカを解き明かす〈糸口〉があるという筆者の研究者としての、また、一定の論拠に基づく〈予測〉がある。

第二章では、文字を通してはわかりにくいアメリカの宗教伝統を、テレビ番組の『ホワイトハウス』を具体例として検証した。このシリーズを観ると、いかに、アメリカ合衆国に「宗教」、特に、「キリスト教」が根付いているかが鮮明に伝わってくる。「9.11以後」、アメリカ研究は再検討を迫られている。イスラム教という新しい対象をどのようにあつかったらいいのだろうか。この事件以後に急いで作成された『ホワイトハウス：特別番組』の内容紹介と分析は、特に筆者が力を入れた部分である。日常的に「聖書」を引用する大統領、日曜日は教会へ一緒に出かける大統領夫妻、死刑反対意見の代表者として、「ユダヤ教徒」、「クェーカー教徒」、「カトリック教徒」の考えを代弁する登場人物たち。ファンダメンタルな教派から、常に「圧力」を受けるスタッフたちは、「票」のために苦勞する。本稿では、その一部のみ紹介したが、このシリーズはさらに詳しく検証する価値を含んでいる。前述したが、第三章は、不十分な指摘で終わっている。今後の展望を述べたに過ぎない。

9.11以後、イスラム教の研究の遅れが指摘されている。確かにそれは必要である。しかし、敢えて筆者は、原点に戻って、アメリカ合衆国の宗教伝統として「キリスト教」を再検討することが重要であると考え。しかも、単に、ピューリタン以後の歴史をたどるだけではなく、「宗教とは何か」を普遍的に（アメリカに限定せず）考察する必要があるだろう。『患者の饗宴』は、アメリカにのみ当てはまるものではない。古くはヨーロッパ、形骸化してはいるが、現在の日本など、比較の対象は多くある。前提として、日本の宗教とは何かを理解することから始めたい。自国の宗教伝統への認識、すなわち、発信する拠点あつての比較研究であることを確認して、今後の研究を進めたい。

注

1) シドニー・E. ミード（野村文子訳）、『アメリカの宗教』、日本基督教団出版局、1978、pp.84-85

- 2) ジェラルド・C. ブラウアー (野村文子訳), 『アメリカ建国の精神－宗教と文化風土－』, 玉川大学出版部, 2002
- 3) ミハイール・バフチーン (川端香男里訳), 『フランソワ・ラブレーの作品と中世ルネッサンスの民衆文化』, せりか書房, 初版第1刷1973 再版第1刷1980 再版第6刷1997 (再版によせて－訳者あとがき) に以下の記述がある。筆者が現時点で調べた資料のなかで, コックスの『愚者の饗宴』について言及した文章はこれのみである。「バフチーンの著作の第二の意義は, この民衆の笑いの文化・カーニバル的な世界感覚と結びついている－同時に遊びと祭り結びついている－グロテスクの本性の解明である。民衆に根をもつ笑い・遊び・祭りの文化・文学の解明のおおよその方向は, あまりにも有名なホイジンガの『ホモ・ルーデンス』, 神学者ハーヴィ・コックスの『愚者の饗宴』と相符合するものである。ただ, ホイジンガが遊び人間 (ホモ・ルーデンス) に焦点を合わせ, コックスが祭り人間 (ホモ・フェスティウス) を対象としたのに対し, バフチーンは笑う人間 (ホモ・リーデンス) を視点の中心においた。」 (pp.418-419)
- 4) Harvey Cox, *The Feast of Fools : A Theological Essay on Festivity and Fantasy*, Harvard Uni. Press, 1969 p. vii)
本文引用部分は野村訳
- 5) 堀一郎・池田昭訳 未来社
- 6) 河合秀和訳 未来社
- 7) 上掲書 p.350
- 8) 島蘭進・中村圭志訳 みすず書房
- 9) 上掲書 p.398
- 10) シドニー・E. ミード 前掲書 p.7
- 11) 上掲書 第4章 第V節
- 12) 上掲書 pp.23-24
- 13) ジェラルド・C. ブラウアー 前掲書 pp.170-186
- 19) コックスの著書は, 以下のとおりである。
God's Revolution and Man's Responsibility, The Judson Press, 1965
The Seduction of the Spirit : The Use and Misuse of People's Religion, A Touchstone Book, 1973
Turning East : Why Americans look to the Orient for Spirituality—and What that Search can Mean to the West, A Touchstone Book, 1977
Religion in the Secular City: Toward A Postmodern Theology, A Touchstone Book, 1984
The Silencing of Leonardo boff: The Vatican and the Future of World Christianity, Meyer-Stone Book, 1988
Many Mansions: A Christian's Encounter with Other Faith, Beacon Press, 1988
Common Prayers: Faith, Family, and a Christian's Journey the Jewish Year, Mariner Books, 2001
Just as I am, in *Journeys in Faith*, Robert A. Raines, ed. Abingdon Press, 1983
Introduction to *Belief or Nonbelief?* Umberto Eco and Cardinal Martini, Arcade Publishing, 1997
Foreword to *Virtual Faith: The Irreverent Spiritual Quest of Generation X*, Tom Beaudoin, Jossey-Bass, 1998
- 20) *The Feast of Fools*, p.vii 本文引用部分は野村訳